

## 2023年12月24日降臨節第4主日説教

サムエル記下7章4、8—16節

ローマの信徒への手紙16章25—27節

ルカによる福音書1章26—38節

本日は、降臨節第4主日の日曜日ですが、降誕日の前日、いわゆるクリスマスイブでもあります。午後は、キャロリング、降誕日前夕の礼拝、深夜の降誕日第1聖餐式と礼拝が続きます。この時期ならではの恵みを、たくさんいただきたいと思います。

本日の福音書は、マリアへの天使ガブリエルによる受胎告知と呼ばれる物語です。ルカによる福音書にしかない記述ですが、非常に有名であり、イスラエルのナザレには、受胎告知教会があります。

ルカによる福音書のイエス・キリストの誕生物語は、マタイによる福音書のそれと異なり、洗礼者ヨハネを産むエリサベトとイエス・キリストを産むマリアとが対比させられるような形で書かれています。そして、この二つの女性についての記述は、単なる対比以上に深い関わりがあります。

物語は、「**六か月目に、天使ガブリエルは、ナザレというガリラヤの町に神から遣わされた**」(ルカ1:26)とはじまります。何の六か月目かというのと、明らかに少し前にある「**その後、妻エリサベトは身ごもったが、五か月の間は身を隠していた。そして、こう言った**」(ルカ1:24)にある、エリサベトの出来事でしょう。また天使ガブリエルが唐突に現れますが、すでにザカリアに遣わされていました。「神から遣わされた」という描写は、天使の名の通り、主なる神様の意志を伝えるために送られたことを明確にしています。

マリアは、天使ガブリエルから、主がマリアと共におられ、男の子を産むこと、そしてイエスと名づけなさいと言う告知を受けます。しかし、マリアは当然、「**どうして、そんなことがありえましょうか。私は男の人を知りませんのに**」(ルカ1:34)と、そのことを信じられないのです。だからガブリエルは、生まれる子は「**聖霊があなたに降り、いと高き方の力があなたを覆う。だから、生まれる子は聖なる者、神の子と呼ばれる**」(ルカ1:35)と語り、また親類のエリサベトにも不思議なことが起っている、何故ならば「**神にできないことは何一つない**」(ルカ1:37)からだと語るのです。その説明を受けてマリアは、「**私は主の仕え女です。お言葉どおり、この身になりますように**」と答え、天使も立ち去るのですが、その時点でマリアは、天使ガブリエルの告知を信じて受け入れたかということ、実際にはそうではありませんでした。本日の福音書個所を超えますが、物語は続くのです。

本日の箇所の後、マリアは、エリサベトのもとへ行って、本当にエリサベトにも不思議なことが起きているのか確かめに行くのです(ルカ1:39-45)。マリアは、六か月目のエリサベトの姿を自分で確かめて、天使ガブリエルが告げたことが本当であることを知ったのです。そのようなマリアにエリサベトは語ります。「**主がおっしゃったことは必ず実現すると信じた方は、なんと幸いですでしょう**」(ルカ1:45)と語ります。日本語訳ではわかりにくいので

すが、「信じた方」は、女性形になっていますので、一般的な人間ではなく、女性であることを告げています。すなわち、「マリア」のことです。マリアは言葉では確信できなかった事柄を、自分で確認して、それから有名なマリアの賛歌を歌うのです。

さて、今日この物語から学びたいことは、天使ガブリエルが語った言葉、「**神にできないことは何一つない**」という事柄です。わたしたちは、使徒信条でもまた、この後のニケア信条でも、「全能の父（なる神）」という信仰を告白します。また、祈りの中でも用います。実際、そのように信じているのです。そして、イエス・キリストの誕生も、洗礼者ヨハネの誕生も、その主なる神様の全能さの一つであるかのように勝たれています。しかし、本日の物語は、「**神にできないことは何一つない**」という言葉で、自分で確認するまで確信できなかったマリアの姿を描きます。疑ったとまでは言わないとしても、エリサベトに出会うまで、確信できなかったのです。おそらく、エリサベトも、自分の身に起きたことの意味を、マリアの訪問によって、理解したのでしょう。そこに今日の私たちにとっても大切な事柄があります。

イエス・キリストの誕生は、不思議な出来事です。主なる神様は、その不思議な出来事を、ただ信じるように促していません。マリアとエリサベト物語が示すように、人間の行動で確かめ合うことをゆるしているのです。むしろ、それが大切ともいえるのです。マリアとエリサベトのように、自分たちで確認するからこそ、出来事が起こることへの深い確信と、その意味への悟りへと導かれるからです。

教会は、全能の神を信じる集いであり、またその信仰を確認しあう集いともいえます。疑うこと、迷うことが許されないということではなく、すべての人が半信半疑であったとしても、教会に集められる人は、一人ではないので、確認し合うことを通して、主なる神様が全能であることへの確信に至ることができるのです。そして、その全能なる主なる神さまの意志とは何か悟ることができるのです。

クリスマスのこの時、わたしたちが臨むことはたくさんあると思います。その中の最大な事柄といえるのは、今起こっている戦いが、主なる神様のご意思にかなった形で、一日も早く集結することでしょう。そして、この地上にまことの平和が訪れることでしょう。本当にそのようなことは可能なのだろうかと思ってしまう。しかし、だからこそ、今年もイエス・キリストの誕生を祝おうとしている現代のわたしたちにも、「**神にできないことは何一つない**」という天使ガブリエルの言葉が響くのです。

わたしたちが、お生まれになったことをお祝いしようとしている方、イエス・キリストによって、本当の平和が実現しつつあることを、心から願い、また確信し合いたいと思います。わたしたちが集められ、祈り、聖書から学び、賛美をささげる限り、そのまことの平和の実現への希望が、決して失われることがないことを、今年も確認したいと思います。